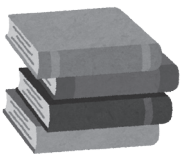


ご隠居Nの ノンフィクションの ススメ

仲野 徹



ノンフィクション読み、ことはじめ

ノンフィクションといえば浜村淳である。といっても、浜村淳の書いた本がノンフィクション好きになっただきつけかという訳ではない。それに、浜村淳といっても知らない人が多そうだ。まずはそこから話を始めてみたい。

浜村淳さんは、大阪人ならば誰一人知らぬ人はないラジオのパーソナリティーである。「ありがとう浜村淳です」というMBSラジオの朝の帯番組は、なんと

故原因に迫った本である。この三つの事故は、なんと一九六六年の二月四日、三月四日、三月五日に連続しておこったものである。

出版されたのは一九七二年で、翌年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。残念ながら絶版になっているが、おそらく今読んでも面白いはずだ。このように、ノンフィクションを好んで読むようになったきっかけは浜村さんなのである。

余談になるが、二〇二二年の大晦日、「ありがとう浜村淳です」にゲスト出演させていただいた。すこし大げさだが、いわばノンフィクションを読むようにしてくださいだった恩人である。浜村さんの深夜番組で映画や本の紹介を聞いてなかったら人生が違っていたかもしれないとお礼を申し上げることができて、すこく嬉しかった。

柳田邦男は後にNHKをやめ、原爆で壊滅した広島を襲った台風を描いた『空白の天気図』（文春文庫）、国立がんセンター設立の歴史『ガン回廊の朝』（講談社文庫、Kindleのみ）、自死を図った息子の臓器提供を巡る『犠牲 わが息子・脳死の11日』（文春文庫）など、さまざまな分野で快作を出し続けた。

一九七四年から続いている驚異的な長寿番組なのだから、それも納得できるだろう。その昔、わたしが高校生時代——その長寿番組が始まったころだ——に、「ヒットでヒットバチオンというこう！」というラジオの深夜番組があった。なんやねんその「バチオン」ってというのはさておき、こちらはパーソナリティーが日替わりで、その木曜日担当が浜村さんだった。毎週、とても楽しみに聞いていた。

浜村さんいちばんの得意技は、映画そのものよりも面白いとまでいわれる映画解説である。なかでも伝説的なのは、ブルース・リーの『燃えよドラゴン』だ。「必殺飛燕—文字五段蹴り」とか「真空急降下直角三段蹴り」とか「胡蝶肘打ち三段返し」とか、血湧き肉躍る必殺技解説用語を勝手に作り出し、文字通り縦横無尽だった。そしてその深夜番組では、映画だけではなくて本の解説もされていた。

ある日のこと、映画解説に劣らぬ面白さで紹介されたのが柳田邦男の『マッハの恐怖』だ。当時、NHKの社会部記者だった柳田が、日本でおきた三つの航空機事故、「全日空羽田沖墜落事故」、「カナダ太平洋航空機墜落事故」、「英国海外航空機空中分解事故」の事

伝記を読もう

子どものころから伝記好きではあった。基本的に伝記はノンフィクションである。基本的には、って、伝記は全部ノンフィクションとちゃうんかと思われるかもしれないが、必ずしもそうではない。当人の記憶はそうになっているのかもしれないが、自伝にはけっこうフィクションがはいっている。

有名どころでは、「崩れ落ちる兵士」という写真があまりに有名な戦争写真家ロバート・キャパの『ちよつとピンぼけ』（文春文庫）、トロイア遺跡の発掘で知られる考古学者ハインリヒ・シュリーマンの『古代への情熱』（新潮文庫、岩波文庫）、二・二六事件で暗殺された第二十代内閣総理大臣・高橋是清の『高橋是清自伝』（中公文庫）など。これらの自伝と、後に出された客観的な評伝とは、ここぞというところで結構違いがあったりして笑える。読み比べがオススメだ。

それはさておき、一般的には、伝記もノンフィクションの一ジャンルである。偉人の伝記は、多くの場合、とんでもない幸運に恵まれたりするのがいい。小説な